

令和元年度 奈良市立六条幼稚園 研究実践概要

園長名 南波 早由美

園児数 53名

1. 研究主題 「こころとからだで感じられる子ども」
—おもしろそう・やってみたい・できた喜び—

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

昨年度は子ども同士の対話や保育者と子どもとの対話に着目し研究する中で、保育者間で遊びを振り返り、環境の再構成をしたり適切な援助をしたりすることがより遊びの広がりにつながり、意欲や期待につながるということがわかった。その成果と課題をふまえ、子ども同士や保育者と子どもの対話に加え保育者間の対話を大事にすることで、より遊びが深まり子ども達の「おもしろそう」「やってみたい」とこころとからだで感じ「できた喜び」につながるのではないかと考え主題を設定する。

4 具体的な研究内容

① 研究のねらい

こころとからだで感じられる子どもにつながる保育者の援助や環境構成について考える。

② 研究の重点

実践より子どもの姿を分析し「おもしろそう・やってみたい・できた喜び」につながるための保育者の援助、関わりについて共通認識する。また保育者間で遊びを振り返り、様々な視点から姿を見取る。

③ 活動の方法

援助・環境構成

職員間の話し合い

保育者の意図

【4歳児】 5月の事例 『泡欲しい』

(ねらい) 友達がしている遊びに興味を持ち、自分で試したり自分の遊びに取り入れたりする。

・園庭遊びをしている際、5歳児が「ジュース屋さんですよ」と色水で作ったジュースを売りに来てくれたことをきっかけに、ジュース作りが始まった。花や葉っぱ、果物の皮などを容器に入れ、すりこぎで叩き、色が出るのを楽しんでいる。隣では、水が入ったタライに石鹸をいれ、泡遊びをしていた。ネットや洗濯板などを使い、タライいっぱい泡ができるのを楽しんでいる。

・泡遊びをしていたA児が透明のボウルに水を入れ泡を作っていると、水と泡の層をみて、透明のカップにすくい「先生見て、ビールできた」と嬉しそうに見せた。ジュース作りをしていたB児は「泡欲しい」とタライで泡づくりをしているC児達に伝え、泡をもらい、作ったジュースにのせて「泡ジュース」と喜んでいて。その様子を見て、ジュース作りをしていた子ども達が「私も泡欲しい」「僕もちょうだい」と泡をもらい自分の作ったジュースにのせて「クリームがのってるジュースや」「おいしそう」と思い思いに楽しんでいた。

・タライで泡づくりをしていたC児達は「泡屋さんやな」「泡どうぞ」「これ(お玉)でとってください」と自分達が作った泡が必要とされることを喜び、泡屋さんとなり楽しんでいた。

ジュース作りに必要な素材や用具を取り出しやすいように準備しておく。

保育者間で話し合い、コーナーをそれぞれの遊びが互いに見える環境に設定する。

A児の言葉に「泡がのってるからビールみたいやね」と共感し、周りの子どもにも気付けるようにする。

「大人気やね。いっぱい作らないとね」と満足感を感じたり、必要とされる喜びを感じたりできるようにする。

<考察> 初めは一人一人好きな遊びを楽しんでいたが、少しずつ周りにも目がいき、友達がしていることに興味を持ち始め、友達の遊びを取り入れ、自分でも試しながら遊んでいた。

別のコーナーで遊びを進めていたが、保育者間で話し合いコーナーをそれぞれの遊びが互いに見える環境に設定したことで、友達がしていることに興味を持ち刺激を受けて、自分では気付かなかった組み合わせをしたり、自分達が作った泡が必要とされていると感じ泡屋さんとなったりして、遊びがおもしろくなり友達との関わりも広がった。

【5歳児】 6月の事例 『人が足りない』

(ねらい) 友達と思いや考えを伝え合い、同じ目的をもって遊ぶ楽しさを味わう。

・数名の子ども達が園庭で樋に水を流してビー玉の転がし遊びを始めますが、園庭に傾斜が無く幅もないことや、それぞれの思いが違い、上手くコースが作れず、みんなで思いを出し合うことになった。

「長くて曲がるコースをつくりたい」「グネグネ曲がるようにしたい」「長いコースにしたいけど狭いからむずかしい」といろいろな思いを出すと、聞いていた友達が昨年の5歳児がテントの骨組みを使って転がしをしていたことを思い出し提案する。

・子ども達から出た案を受け止め、テントや排水ホース、透明ホースを準備し、翌日から遊ぶことになった。しかし、樋を固定しようとするが、樋の重さや水の勢いですぐにコースが壊れてしまい、思い通りにいかない。保育者も入りながら「もっと固定するための洗濯バサミがある」「もっと大きい洗濯バサミなら大丈夫かもしれない」など思いを受け止め用意し、支える道具を増やして再び試してみるが、やはりホースの部分で水がたまってくと重さで壊れてしまう。

みんなで話し合うと「道具がダメなら自分達で持ってみたらいいんじゃないかな」と案がでて翌日に試すことになった。

・次の日、遊ぶ前に子ども達で水を流す役や水を注ぐ所を支える役など役割を話し合っている。

しかし遊んでいる人数では上手く持つことができず、「だれかここに人が足りないから来て」と叫んで手伝いを求めた。その声を聞いた友達が手伝い、もう一度水とビー玉を流すとホースから樋に流れ、成功を喜ぶことができた。



友達が悩んでいる気持ちに共感し、一緒に考える気持ちを持ちながら、話し合えるようにする。

昨年の5歳児の様子を聞いてイメージを持ったり、道具を用意したりし、子ども達がいつでもできるような環境をつくる。

子どもの気付きを受け止め、共感しながら試行錯誤できるように環境を再構成していく。

「今日は成功したらいね」と期待をもって試せるよう声をかけ見守る。

<考察> 4歳児から継続して遊んでいた遊びであったが、コースが単純になってしまい、さらに面白く遊んでほしい、何かやりたいイメージがあるのではないかと思い、振り返りでゆっくり話し合う時間をもった。また保育者も昨年の5歳児の様子を聞いてイメージを持ったり、道具を用意したりして、子ども達がいつでもできるような環境をつくった。子ども達の思いを引き出したことでほかの友達の案も共有し、骨組みを使った曲がるコースを実現することができた。はじめはぶら下げる道具の種類にこだわり、洗濯バサミの大きさや付ける間隔を変えて繰り返し試していたが、何度も失敗を経験し話し合う中で、道具だけでなく友達と協力することや声を掛け合うこと、タイミングを合わせることの大切さに気づき、成功することができたと考える。

【5歳児】 10月の事例 『パチンコ屋さんを始めました』

(ねらい) 共通の目的をもった友達と考えを出し合いながら、遊びや活動に意欲的に取り組む。

・幼小交流で10月上旬に「おもちゃランド」に招待してもらい様々な手づくりのおもちゃで遊ぶ機会があった。帰ってから子ども達に感想を聞くと「お兄さんやお姉さん、優しく教えてくれた」「段ボールで作ったパチンコがおもしろかった」と声が聞かれた。その日の午後、A児が製作のコーナーで空き箱を使って自分なりにパチンコを再現

交流を振り返り、楽しかった思いや感謝の気持ちを感じてほしい。

していた。「何作ってるの?」と聞くと「今日遊んだパチンコみたいに作りたいけどお兄ちゃん達のは釘を使ってた」と話す。以前、違う遊びで釘を使う事を経験していたので「釘使いたい?用意できるよ」とA児の思いに共感し釘や板や木片などを準備しておいた。

・翌日A児や数名の子ども達が板に思い思いに釘を打ったり、木片をボンドで貼ったりしてパチンコをつくりだした。玉を転がすうちに板の周りを囲わないと玉が落ちてしまう事や傾斜があることなどに気づき、友達と気付いたことを教え合っている。初めは一人一人作っていたが「先生大きい板がほしい、Aちゃんと一緒につくりたい」と一緒に作り始めた。「落ちた所に点数をつけよう」「スタートって書いてわかりやすくしよう」ともっと面白くなるように案を出し合い作っていた。

・「先生、小さい組さん誘ってくるわ」とチケットや看板を作り誘いに行く。「パチンコ屋さんやってますよ」「チケットをもってきてください」と呼びに行き、来てくれた友達に「〇回までできますよ」「ここ(スタート)から初めて〇に入ったら〇点です」と優しく説明をしながらパチンコ屋さんを楽しんだ。

おもちゃランドでの楽しかった経験に共感し、作ってみたい思いを受け止め材料を用意する。

友達と一緒に一つの物を完成させたい思いに共感し、子どもの声を受け止め環境を準備する。

4歳児を誘いたい思いを受け、年齢間で遊びの様子を共有し、誘いあって遊べる環境を用意する。

<考察> 小学校の「おもちゃランド」のお兄さんやお姉さんへの期待やおもしろかった経験、今まで転がし遊びを通してビー玉を転がして遊んでいた経験からパチンコ(コリント)遊びにつながった。初めは転がるだけの単純なパチンコだったが、保育者も友達と一緒に一つの物を完成させたい思いに共感し、子どもの声を受け止め環境を準備したことで、よりアイデアが膨らみよりおもしろいパチンコができあがった。また「小さい組さんを誘いたい」思いを受け、職員間で連絡を取り合って、年齢間の遊びの様子を共有し、誘いあって遊べる環境を用意したことで小学校のお兄さんお姉さんにしてもらったことを再現し、自信につながった。

【4歳児】 12月の事例 『化石発掘隊!』

(ねらい)友達とイメージを共有しながら一緒に遊ぶことを楽しむ。

・職場体験で中学生達が砂場にダイナミックな大小の山を作ってくれ、その中から見つけた石を恐竜の化石にイメージし喜んで話した。話を聞いた周りの子ども達も「やりたい」とみんなで化石発掘を楽しんでいた。

・数日後、A児が恐竜の番組を見て母親に描いてもらった化石の絵を持ってきたことをきっかけに「恐竜の絵を描きたい」と恐竜の絵をグループで話し合いながら描き、恐竜のイメージを共有した。

・後日、B児が「恐竜の体を作りたい」とみんなに伝える。「どうやって作ろうか」とB児のやってみたい思いを受け止め、他の友達に聞くと「箱の中に入れるのは?」「恐竜はもっと大きいよ」「大きい紙に貼るのは?」という意見が出たので保育者が「大きい紙ってどれくらいの大きさ?」と聞くと「前に絵を描いたくらいの大きさの紙がいい」と伝えた。

「描いた絵に化石を貼るのはどうかな?」「大きいから作れそう」と話し合い、みんなで描いた絵の上に発掘した化石を貼ることになった。

友達と再び砂場に行き、「歯の化石を見つけた!」「頭の化石だ」と発掘をしたり、「一緒に貼りに行こう」と、恐竜の全身の件で骨格を作ったりして楽しんでいる。

職員間で子どもの思いや遊びの広がり話し合い、再度環境を構成する。

B児の思いに共感しながら友達と一緒に実現してほしい。

子ども同士で思いや考えを出し合いながら遊びのイメージを共有してほしい。

<考察> A児の化石の発掘を見て、やってみたい、おもしろそうだと興味をもち、友達と一緒に恐竜の絵を描いたり、どうやって全身の骨格を作ろうか考えたり、できた時には喜びを感じることができた。また、保育者が友達との話す場を作ることで友達に自分の思いを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら遊ぶことができたが、もっとおもしろくなるような環境の設定やタイ

ミングに難しさも感じた。職員間で子どもの思いや遊びの広がり話し合い、環境を再構成したことで骨格作りの遊びに広がり、恐竜に興味がない子も興味を持ち始めることができた。さらに生活発表会では恐竜が登場する創作の話で体を使って動きを表現し、なりきって楽しむことができた。

【4歳児】1月の事例 『ラーメンいかがですか？』

(ねらい) イメージを共有しながら役割分担をし、お店屋さんごっこを楽しむ。

<ul style="list-style-type: none"> ・2学期、体操で「ラーメン体操」をしていた。A児が「ラーメン食べたいな」と言ったことからラーメンづくりが始まり、<u>ラーメン屋さんごっこを楽しんでいた。</u> ・3学期に入り、引き続きラーメン屋さんごっこを楽しむA児達。ラーメンを作る役と売る役に分かれ遊んでいた。売る役になっていたB児は「ラーメンいかがですか?」「ご注文は何にしましょうか?」とラーメンを買いに来た友達だけでなく、保育者や他の遊びをしている友達にも自ら注文を聞きに行き、ラーメンを届けていた。 ・B児が突然「先生、そら組さんとこ行って来る」と波段ボールで作った電車に乗って5歳児の保育室に行く。しばらくして帰ってきたB児は「ラーメンー丁!」と言い、5歳児の注文を聞いて嬉しそうに帰ってきた。そして出来上がったラーメンを持って再び5歳児の保育室に届けに行った。それを見ていたC児が「僕も行く、乗せて」とB児が乗っていた波段ボール電車の後ろに乗り、一緒に注文を聞きに行った。 ・「さくら組さんにも注文聞いて来る」と隣のクラスにも行き、「ラーメンいかがですか?」と自分達が作ったラーメンをみんなに振る舞い楽しんでいた。 	<p>継続して遊びを楽しめるようにコーナーを整え、材料を用意しておく。</p> <p>役割を決めて遊ぶことで更に遊びが広がって欲しい。</p> <p>B児の気持ちに共感し見守る。</p> <p>5歳児や他のクラスの友達と関わりたい気持ちを持ち、お店屋さんを通して遊びを展開していることを共有する。</p>
---	--

<考察> 1学期や2学期の遊びの中で、5歳児がお店屋さんなどに誘ってくれていた経験や、5歳児がしていることに興味や憧れを持っており、5歳児の保育室へ行きたいという思いが強く、事あるごとに遊びに行っていたことが今回の遊びに繋がったと考える。また5歳児や他のクラスの友達と関わりたい気持ちを持ち、お店屋さんを通して遊びを展開していることを職員間で共有し、その気持ちを受け止めながら遊ぶことで喜びや満足感を味わうことができた。

5. 研究の成果

事例の分析より4歳児は保護者や5歳児等様々な人が関わり、偶然の発見や興味関心をもったことからおもしろい、やってみたくて意欲的な遊びに繋がり、更に遊びを進めていった。また5歳児は4歳児での経験を活かし、子ども同士が話し合い同じ目的を達成するために繰り返し、試行錯誤しながら目標に向けて心を動かしていった。子ども達は対話を通して、互いの思いを知り、共感したり違いを受け止めたりしながら、遊びを展開し深めていった。子ども達ができ喜びを感じられるためには、保育者が子どもの思いに寄り添い、援助や環境構成をするだけでなく、その過程やクラスの実態を保育者間で共通認識し、職員全体で遊びの環境を構築していくことが大切なことがわかった。

6. 今後の課題

今年度は昨年度に引き続き、子ども同士の対話や子どもと保育者間の対話に着目するとともに保育者間の話し合いにも着目して、子どもの姿を共有し、適切な援助や環境構成をすることがさらに遊びを深め、主体的な遊びに繋がることがわかった。

今年度の遊びを通して、子ども達は十分に心を動かし、遊びに没頭する姿がみられている。しかし、狭い園庭の遊びでは体を使うことが不十分な面もあり、子どもの姿より体幹の弱さも感じられる。来年度は子どもの実態をふまえながら広い園庭で、のびのびと体を動かしながら面白そう、やってみたくて感じられる遊びの環境を考察していきたい。